

海外生活レポート

アフガニスタン 8

Norko Dethlefs(紀子・デスレフツ)さん

外出が監視される

ありがたいことに、2月に手紙を書いた頃に比べると街はずっと静かになりました。でもデンマーク人の友達は保健教育のプログラムの途中でコペンハーゲンに引き上げたまま、まだ戻ってきません。私たちも一週間ほど外出が厳しく監視されて、避難用の荷物をまとめておくように言われました。家族や友達を送ってくれた、とっておきの食料を全部置いて逃げるなんてとても忍びなくて、住居から出られなかった間、少しずつ贅沢を楽しんでいました。そうして、身体を暖めるためと運動不足解消をかねて、庭でささやかなキャッチボールをしていました。キャッチボールをしていると町中の銃声や暴動を忘れることができ、良い気分転換になりました。

取り囲まれパニック寸前!

その後、規制は少しずつ緩和されて、ごく限られた地域なら指定された車が自転車で出かけても良いことになりました。「自転車」というのは、「それでも走るよりは早く逃げられるから」ということらしいです。そこで勇気をだしておもむろに自転車で外に出てみたら、とたんに何だ!とばかり寄ってきた男の子たちに取り囲まれてしまいました。みんな、まるで闘いを挑むように私に握りこぶしを突きつけてきて...。一瞬パニックに陥りそうになったけど、にっこり笑いながら手を差し出して、「私は英語の先生なのよ。あなたたち何か英語知っている?」って言うてみたら、その場の雰囲気が一変して、汚れた10本の手が差し出されました。そのどれもがこのおかしな外人と握手したがって、私たち、やがて一緒に笑ってしまいました。何がおかしくて笑っているのか私にはよくわからなかったのだけど、でも仲良くさよならできてほっとしました。

言葉の理解

ある英語の授業のとき私が、「この国の将来にとって観光事業(ツーリズム)はきっと役にたつわ」と言ったところ、「そんな恐ろしいこと!」と生徒たちは口々に言って大騒ぎ、何のことはない、みんなは私が「テロリズム」と言ったと勘違いしたのです。誤解が解けてホッ。それにしても些細なミスも人を侮辱しかねないから気をつけたいといけません。ある生徒は「lawyer(ロイヤー:

弁護士)」を間違えて「liar(ライヤー:嘘つき)」と発音していました。私のダリ語なんてもっとひどいものです。友達を励まそうと「deg nab A shen(悲しまないで)」と言ったつもりが、「deg na bAshen(ソース鍋にならないで)」なんて言っていました。もっとも彼女をにっこりさせる事は出来たのですけど!

順調に進んでいる事

ついにこの間から、オフィスで働いてくれている守衛さんと掃除人たち12人のために、朝7時から英語の授業を始めました。皆、アルファベットを読んだり書いたり出来るようになり、「こんにちは、私はアーマッド、掃除人です」と言えるようになり大喜びです。それに、今、「能力開発」の一環として、現地の人を初心者のための英語講師として養成しています。こうした本当にささいなことでもみんなが心から喜んでくれるのを見ると、なんだか胸が一杯になって頭が下がる思いです。女性のための体操クラスも順調!皆、体操したあと気持ちが良くなってとても喜んでくれて、「村の女の人たちにもこの体操を教えてあげたいので、そのための簡単なプログラムを作ってほしい。」とまで言ってくれています。この体操のクラスは始めたときから、きっといつか皆に喜ばれるだろうって確信していました。

西側諸国の離婚は女性のモラルの問題!?

その一方、西側諸国での離婚事情に対する男子学生の考え方に対しては、私は全く成す術がありませんでした。彼らにしてみれば、男が自分の妻(たち)に満足できなかったらさっさと他の女性と結婚すれば良いのに、それが出来ないのは何故なのか理解に苦しむようです。それは合法的ではないこと、女性の側からの離婚申し立てが多いことを説明してあげたら、かなりショックを受けたようです。そういう女性には罰を与えなければならない、刑務所に入れなければならない、と彼らは信じて疑いません。そして、「一体、そういう女性たちのモラルはどうなっているんですか?」って私に尋ねるのです。

さて、このところ暖かくなってきて週2回のシャワーでは少し物足りなさを感じるほどです。私はもうすぐカブールに行って「外国語としての英語教育」全国ミーティングに参加します。その後、日本に飛んで家族に会い、娘たちに会う為にシンガポールに立ち寄ってから戻ってくる予定です。また、ここでの生活についてもっと皆さんにお話したいと思っています。

心からの挨拶と愛と共に

紀子

地球市民講座

「自然破壊/紛争地帯からのレポート」
開かれる

(写真・文 松本浩次郎)

「自然破壊/紛争地帯からのレポート」のテーマで、国境なき医師団/元副会長・現横浜国立大学講師・関口元氏の講演会が、3月10日国際交流センターで開催され、120名を超える参加者に衝撃と感動を与えました。

特に内戦やテロで紛糾し、貧困に悩む世界各地の子供



たち ソマリア、ベトナム、マダガスカル、チェチェンなど、紛争と貧困の第一線で保護活動に直接取り組んでこられた講師の姿は、動画やスライドを使っ

ての現地のビジュアルな映像と共に、聴衆の心に迫りました。

講師が強調した「この安全で豊かな日本」と、世界の各地で現在も起こっている紛争と貧困が強く認識され、地球市民として関心を共有できた貴重なひと時でした。

国際交流協会だより

姉妹都市リエカとクロアチアの魅力

事務局長
猪瀬 敦

クロアチア共和国のリエカ市、1977年に川崎市が初めて姉妹提携を結んだ都市である。

リエカはアドリア海の奥に位置した港湾都市。私がそのリエカを訪問したのは、内戦2年前の1989年10月。時期的にアドリア海のまぶ



リエカ・コルソ大通り

しい陽光と観光地の賑わいはなかったが、複雑に折り重なる海岸線と石灰質の丘陵に点在する赤い屋根と白い壁の瀟洒な家々は、芸術的とも言える美しさであった。

第一次世界大戦後、一時イタリアに併合されていたリエカは何処となくイタリア的な感じがする。「フィウメ」とはリエカのイタリア語名。ちなみにリエカとは「川」の意味である。市民はみんな明るく屈託がない。すぐに親しくなれる雰囲気がある。

近年、クロアチアは日本人にとっては極めて親近感の

ある国となった。それにはサッカーの影響が大きいと思う。昨年のサッカーワールドカップ。サラエボ出身ではあるがオシム氏の日本代表監督就任。さらに三浦和良選手のクロアチア・ザグレブでの活躍がある。今年5月には世界卓球選手権大会も開かれた。

クロアチアの魅力は何と言ってもアドリア海の美しい自然と様々な民族抗争により形成された文化の特異性であろう。ドブロブニクをはじめ多くの都市が世界遺産となっている。ヨーロッパのみならず、多くの人々が一度は行ってみたいと思う場所だ。

リエカ、クロアチアをぜひ訪問してみたいかがだろうか。姉妹都市提携30周年を迎えた今秋、協会では市民交流団を派遣する。

川崎市国際交流センター

〒211-0033 川崎市中原区木月祇園町 番 2号
TEL 044-435-7000 FAX 044-435-7010
http://www.kian.or.jp/kic/



編集後記

2007.7.1(日)にすっかりおなじみとなった「インターナショナルフェスティバル in 川崎」が川崎市国際交流センターにて開催されます。今年度は世界の物産・世界の料理・フリーマーケットはもちろんのこと、各国の音楽やダンスなど盛り沢山です。ぜひ、足を運んで楽しんでいただけたらと思います。

(青柳 尚子)